

(4) 定点把握対象五類感染症の概況

ア 患者定点について(表-3/p.35, 京都市感染症発生動向調査事業指定届出機関(定点)名簿/p.186~189)

定点把握対象五類感染症の発生状況を届出る「指定届出機関(定点)」は、インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点、性感染症定点および基幹定点の5種類からなっており、診断した患者数を週又は月単位で報告することになっている。

平成30年12月末の定点数は、インフルエンザ定点69、小児科定点43、眼科定点10、性感染症定点13、基幹定点1である。

行政区別定点数(平成30年12月末現在)

行政区\定点	インフルエンザ	小児科	眼科	性感染症	基幹
北	7	4	1	1	—
上京	5	3	1	1	—
左京	7	4	1	1	—
中京	5	3	2	2	1
東山	3	2	—	1	—
山科	7	5	1	1	—
下京	3	2	—	1	—
南	5	3	—	1	—
右京	8	5	1	1	—
西京	8	5	1	1	—
伏見	11	7	2	2	—
合計	69	43	10	13	1

イ 年間報告数、定点当たり報告数の推移(表-4-1~5-2/p.36~49, 図-1~2/p.65)

(ア) インフルエンザ定点

インフルエンザの年間定点当たり報告数は、299.26(20,649例)であった。インフルエンザについての詳細は、「(1)ウ 平成30年 インフルエンザのまとめ」(p.4)を参照。

(イ) 小児科定点

小児科定点からの10感染症の年間総報告数は20,312例、年間定点当たり報告数472.37で、平成20年以降の定点当たり報告数では、平成21年に次いで少なかった。上位5感染症は、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順となり、小児科定点全体の89.5%を占め、最も多い感染性胃腸炎は、60.0%を占めていた。

また、過去5年間(平成25年から平成29年まで)の平均値(過去5年平均値)より多い感染症は、10感染症中2染症(RSウイルス感染症、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎)であった。

インフルエンザ定点及び小児科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数の 過去5年平均値との比 ()内は前年比
インフルエンザ	20,649	299.26	1.33 (1.33)
RSウイルス感染症	1,110	25.81	1.13 (0.89)
咽頭結膜熱	493	11.47	0.65 (0.65)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2,577	59.93	1.03 (0.90)
感染性胃腸炎	12,190	283.49	0.92 (0.97)
水痘	522	12.14	0.49 (0.98)
手足口病	1,364	31.72	0.47 (0.35)
伝染性紅斑	195	4.53	0.67 (3.36)
突発性発しん	787	18.30	0.95 (0.94)
ヘルパンギーナ	947	22.02	0.88 (0.93)
流行性耳下腺炎	127	2.95	0.19 (0.25)
合計	40,961	771.63	—

(ウ) 眼科定点

眼科定点から急性出血性結膜炎の報告はなかった。流行性角結膜炎の年間総報告数は237例、年間定点当たり報告数23.7、定点当たり報告数の過去5年平均値との比0.89、前年比0.93であった。

眼科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
急性出血性結膜炎	0	0.00	—
流行性角結膜炎	237	23.70	0.89 (0.93)
合計	237	23.70	—

(エ) 性感染症定点

性感染症定点からの4感染症の年間総報告数は395例であり、その内訳は、性器クラミジア感染症246例、性器ヘルペスウイルス感染症78例、尖圭コンジローマ30例、淋菌感染症41例であった。前年比は、性器クラミジア感染症 1.05、性器ヘルペスウイルス感染症 0.72、尖圭コンジローマ 1.15、淋菌感染症 0.93であり、性器クラミジア感染症及び尖圭コンジローマで前年よりも増加した。

性感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
性器クラミジア感染症	246	18.92	0.92 (1.05)
性器ヘルペスウイルス感染症	78	6.00	1.16 (0.72)
尖圭コンジローマ	30	2.31	0.56 (1.15)
淋菌感染症	41	3.15	0.96 (0.93)
合計	395	30.38	—

(オ) 基幹定点

基幹定点対象感染症は7感染症であるが、報告はなかった。

ウ 月別の報告状況 (表-6-1～表-10/p.40～48, 図-3/p.66～67)

感染症発生動向調査における平成30年の報告週対応表は、<表-1/p.28>に示すとおりである。また、週単位で報告される感染症の月別集計は、対応表に基づいて行っている。

インフルエンザ定点におけるインフルエンザの月別定点当たり報告数は、1月(154.43)、2月(104.45)、12月(11.59)の順となった。

小児科定点における対象感染症の月別定点当たり報告数は、7月、6月、12月の順で多かった。感染症別報告数の月別1位は<表-10/p.48>に示すとおり、年間を通じて感染性胃腸炎であった。

眼科定点及び性感染症定点における対象感染症の月別の報告数は、<表-6-2/p.41>に示すとおりである。

エ 年齢階級別の報告状況 (表-11-1～14-2/p.49～56, 図-4/p.68～69)

インフルエンザ定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、0～9歳が10,134例で全体の49.0%を占めた。

小児科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、1歳が最も多く18.0%を占め、以下2歳 12.6%、3歳 9.1%の順であり、4歳以下が総報告数の58.6%を占めた。

小児科定点における年齢階級別の感染症別報告数は、0～5箇月を除く年齢階級で感染性胃腸炎が1位(0～5箇月はRSウイルス感染症が1位)であり、2位は、0～5箇月では感染性胃腸炎、6箇月～11箇月では突発性発しん、1～2歳では手足口病、3歳以上ではA群溶血性レンサ球菌咽頭炎であった。

眼科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、0～9歳が24.1%、30～39歳が16.9%と最も高く、次いで、40～49歳が15.2%であった。

性感染症定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、20～24歳が26.3%、25～29歳が22.5%、30～34歳が13.2%、35～39歳が8.4%の順であり、20～39歳が70.4%を占めた。

オ 行政区別の報告状況

行政区別の報告数、行政区別の定点当たり報告数、感染症別の行政区別割合及び行政区別の感染症別割合は、<表-15-1～18-2/p.57～64>に示すとおりである。